

## 医師坪井芳治の家系と経歴

泉 彪之助

中国の文豪魯迅は、若い時日本に留学して医学を学んだ。そのため終生日本医学に親しみをもち、しばしば日本人医師を主治医とした。

著者は魯迅と医学との関係に注目し、医史的観点から魯迅を研究してきたが、その一環として『魯迅日記』<sup>(一)</sup>にあらわれた医師・医療機関の調査を行った。<sup>(二)</sup>その際、魯迅令息周海嬰氏の主治医であった篠崎医院（上海）小児科坪井芳治（よしはる）<sup>(三)</sup>医師が蘭学者坪井芳州の孫、すなわち蘭学者坪井信道の曾孫であることを知った。坪井芳州とその子孫については故青木一郎、故仲田一信<sup>(四)</sup>両氏と、最近では山形大学松野良寅教授の研究がある。<sup>(五)</sup>仲田氏の著書にはすでに坪井芳治の名が見られる。しかし魯迅との関係の指摘はこれが最初であると思われるので、調査した内容を報告したい。芳州の子、坪井次郎の経歴と業績については概略にとどめ、詳細は別の機会に報告する。

### 一 『魯迅日記』と医師・医療機関

魯迅は一九一二年五月五日から一九三六年十月十八日まで、二回の短期間の中断を除いて二十四年間日記を書き続けた。内容は生活の備忘録的な記事が主で、医療に関することも多く記載されている。著者の概算したところでは四九名の医師・医療従事者（内、日本人医師・歯科医師二三名）、二六箇所の医療機関（内、日本人経営一四箇所）が記載されて

(11) いる。これを記載日数で順位をつけると、魯迅最後の主治医須藤五百三医師と須藤医院（上海）、山本医院（北京）、篠崎医院（上海）と坪井芳治医師の順となる。医師名に限ると坪井芳治医師は第二位であった。

須藤五百三は岡山県出身で、第三高等学校医学部卒業後、軍医としての生活を送り、大正の初めから上海で開業した。須藤の経歴は著者が明らかにし、別稿で発表した。<sup>(九)</sup>

北京山本医院は、三・一八事件の後、魯迅が政治的避難をした場所の一つとして知られているが、魯迅は山本医院でしばしば診療も受けている。院長山本忠孝は京都府出身で、京都府立医学校卒業後京都市で開業、明治の末から北京で開業した。山本忠孝については現在調査中である。

## 二 芳州坪井為春とその経歴

前述のように、坪井芳州については青木・仲田・松野三氏の研究があり、仲田氏によって詳細な年譜が作成されている。これに加え、松野教授の教示<sup>(七、八、一〇)</sup>、仲田氏の著書出版後に刊行された文献、最近発見した坪井芳州死去直後の明治十九年の『東京医事新誌』に記載された小伝<sup>(二)</sup>などを参照して経歴を検討した。

蘭学者芳州坪井為春は旧名を大木忠益<sup>(一)</sup>といひ、出羽米沢藩の郷医大木松翁の長男として文政七年米沢に生まれた。郷医とは武士の郷土にあたる、俸禄を受けず士分としての待遇を受ける医師である。<sup>(二)</sup>藩医の堀内素堂<sup>(三)</sup>に医学を学んだ後、素堂の紹介で坪井信道に入門した。信道の塾では後に塾監、塾頭をつとめ、信道の死後、坪井信良と共に残された塾生の教育にあたった。嘉永五年江戸芝浜松町で開業、一方信道次女幾と結婚、坪井為春と改名し、芳州と号した。

青木氏は為春の読みを「いしゅん」としているが、<sup>(三)</sup>坪井芳治の女婿斎藤祥男氏によれば、坪井芳治は生前祖父のことを「ためはる」と呼んでおり、母国子からそのように教えられたのであろう<sup>(三)</sup>という。また芳治（よしはる）の名は、芳州と為春から来たものかと思われるので、「ためはる」という読み方がむしろ普通であらう。



芳州の墓は東京都谷中霊園にあり、坪井芳治、柳子と合葬されている。墓の様子が仲田氏の著書の記載と異なっているのは、芳州の墓の横にあった柳子とその子孫の墓が関係者の希望で他へ移され、その際柳子のみが芳州と合葬されたためである。<sup>(三)</sup>この移された墓の建立者謹三郎は、先に述べたように芳州の三男であり、この系統は現在絶えているという。

坪井芳州の著訳書には、『医療新書』(慶応二年)、『医学篇』(明治七年)、『丹氏医療大成』(明治八年)、『弗氏生理学書』(明治八年)、『新撰方鑑』(明治八年)、『生理学書(華氏)』(明治九年)、『衛生新誌』(明治十三年)などがある。<sup>(二一、二二)</sup>

### 三 坪井次郎の経歴

坪井芳州には妻幾との間に長男俊太郎、次男次郎、妻柳子との間に三男謹三郎の三人の息子があったが、長男は夭折した。(図1)次男坪井次郎は、<sup>(三二、二八)</sup>京都帝国大学の初代医科大学長、同大学初代の衛生学教授という輝かしい経歴にかかわらず、早世のためその生涯はあまり知られていない。著者は現在その点を調査中で、詳細は別の機会に発表の予定である。

坪井次郎は、文久二年七月五日江戸芝浜松町に出生、明治八年外国語学校に入り二年間修学、東京帝国大学で予科、本科を修め、明治十八年に医学部を卒業した。衛生学教室に入り、助手を経て明治二十年十一月助教に任命された。明治二十三年ドイツに留学し、ルードウィヒ・マキシミアン大学(ミュンヘン大学の公式名)医学部衛生学教室で四年間研究に従事した。

坪井次郎はローベルト・コッホにも師事したが、主な滞在地はミュンヘンで、直接の指導者は、ペッテンコーフェルの教室のエンメリッヒであった。もともと次郎のペッテンコーフェル追悼演説を見ると、次郎はペッテンコーフェルを恩師と、またエンメリッヒを共同研究者と想っていたようである。<sup>(二五)</sup>次郎はまた、同大学の有名な栄養学者フォイトにも師事した。

明治二十七年末に帰国した次郎は、引き続き東京帝国大学医学部衛生学教室に勤務したが、明治三十二年京都帝国大学

医科大学の創設に際して、衛生学の教授と初代の医科大学長とに任命された。しかし明治三十六年七月十三日京都市西洞院丸太町の自宅で死去した。享年四十一であった。京都市相国寺心源院で葬儀が行われ、同寺に葬られた。<sup>(三三)</sup>ただし現在、墓は京都市高台寺にある。<sup>(三三)</sup>

次郎は多くの論文や著書を残しているが、著書『近世衛生学』は名著とされ、後に遠山椿吉によって増補出版された。<sup>(三〇)</sup>次郎が明治二十三年第一回日本医学会で「家屋衛生」について講演を行ったのは、日本の衛生学者が公開の学会で発表を行った最初であるとされる。<sup>(三二)</sup>彼はまた足尾銅山鉍毒調査委員にも任命されている。<sup>(二八、三二)</sup>

坪井次郎の妻国子(クニ)は、三井合名理事有賀長文の妹で、次郎と国子の間には四人の子があった。<sup>(三三)</sup>

#### 四 坪井芳治の経歴

坪井芳治(よしはる)は、明治三十一年六月二十三日坪井次郎の長男として京都市小石川区西片町で出生、翌年九月ごろ父にしたがって京都市に転居した(表1)。五歳の時に父次郎が死去し、その後、京都府立京都第一中学校(現洛北高等学校)<sup>(三四)</sup>(旧制)第三高等学校<sup>(三五)</sup>を経て大正十三年京都帝国大学医学部<sup>(三六)</sup>を卒業した。当時有賀長文が後見人のような立場にあったため、東京に出て大正十三年七月から大正十五年七月まで慶応大学医学部小兒科学教室に学んだ。<sup>(三七、三八)</sup>しかし一家の生計を支える上で有賀から経済的援助を受けることを好まず、大正十五年秋、上海に渡航して篠崎医院小兒科に就職した。<sup>(三三)</sup>この渡航に先立って芳治は石川三輪子と結婚していたが、三輪子は芳治に続いて上海に渡った。二人の間には三人の令嬢と一人の令息が生まれている。<sup>(三三)</sup>

篠崎医院は、福民医院と並んで、戦前の上海における日本人経営の二大病院の一つである。上海での日本人医師の診療は明治二十年ごろから始まったとされるが、<sup>(三九)</sup>渡航者が増し、共同租界の中に日本人居住区が形成されて行くにつれて、日本人医師の数も増加した。後には無資格で診療するものも出てきたため、昭和二年に上海総領事館は医師規則を制定し、

表 1 坪井芳治年譜 (1898~1960)

明治31年(1898) 6月23日		東京市小石川区西片町で出生, 父坪井次郎, 母国子 (旧姓有賀)
明治32年(1899) 7月	1歳	父が京都帝国大学医科大学長に就任し, 京都に転居
明治36年(1903) 7月	5歳	父死去
大正6年(1917)	19歳	京都府立京都第一中学校卒業
大正9年(1920)	22歳	第三高等学校第三部医科卒業
大正13年(1924)	26歳	京都帝国大学医学部卒業
大正13年(1924) 7月~ 15年(1926) 7月	26~28歳	慶応大学医学部小児科学教室で学ぶ
	28歳	石川三輪子と結婚
大正15年(1926)秋	28歳	篠崎医院 (上海) 小児科に就職
昭和7年(1932) 5月~ 8年(1933) 6月	34~35歳	魯迅令息周海嬰の主治医を勤める
昭和23年(1948)	50歳	帰国, 東京都台東区浅草柳橋で開業
昭和35年(1960) 9月4日	62歳	死去, 谷中天王寺に祖父為春と合葬, 法名「慈眼院養眞徳芳居士」

日本におけると同様の資格を持ったものみに診療を認めるとした。<sup>(四〇)</sup>

篠崎医院は、日本人医師によって比較的早く設立された医療機関で、明治三十三年二月、鹿児島県立医学学校出身の医師篠崎都香佐によって上海西華徳路に開設された。<sup>(四一)</sup>後に篷路(または文路)(現・塘沽路)に移り、東京帝国大学医学部出身の内科医で副院長の秋田康世が、大正十一年に経営権を譲り受けて院長となった。<sup>(四二)</sup>篠崎医院も福民医院も中国での慣習に従って医院と呼ばれているが、実質上は日本と言う病院であった。昭和十年ごろの篠崎医院には、内科、外科、婦人科、小児科、皮膚科、齒科などの診療科と病室があった。<sup>(四三)</sup>太平洋戦争の終戦時には、九州帝国大学医学部出身の耳鼻咽喉科医浜之上信隆が院長となっている。<sup>(四四)</sup>篠崎医院の位置は、文路と呉淞路の交差点から文路側へ二軒目の建物で、向いには日本人クラブ(現在小学校)、隣には京漢銀行(または漢口銀行)(現在共同住宅)があった。篠崎医院の建物は現在も残り、上海市衛生防疫站となっている。

『魯迅日記』によると、坪井芳治は一九三二年五月から一九三三年六月まで、魯迅令息周海嬰の治療にあたった。この

期間の『魯迅日記』にはしばしば、「許広平と海嬰を連れ、篠崎医院に受診」、「海嬰のため篠崎医院に薬を取りに行く」、「坪井医師の往診を受ける」などの記載が見られる。魯迅の一人息子である周海嬰は、魯迅夫人許広平女史を母として、一九二九年九月二十七日福民医院（上海）で出生、北京大学物理学科を卒業して、現在中華人民共和国広播電影電視部に勤務している。周海嬰は、幼い頃病氣した時には日本人医師の治療を受けた。最初は福民医院や他の日本人医師に受診していたが、やがて坪井芳治に受診するようになった。その後魯迅一家が日本人医師須藤五百三に受診し、一家の健康を須藤に委ねた形になったため、坪井芳治の治療は上記の期間で終わった。

坪井医師の診療期間中、同医師一家は魯迅一家と家族ぐるみの交際をした。『魯迅日記』を見てもそのことが伺われる。坪井芳治は趣味が広く、なかでも文学好きであったため、しばしば魯迅と酒を酌み交わしながら文学論をたたかわせた。

『魯迅日記』および三輪子未亡人の証言によれば、魯迅はたびたび坪井医師一家を訪問しているが、魯迅が坪井医師に「いつも私が来ているから、時には私のところへも来て下さい」と招待し、その招待を受けて出かけたこともあったとい<sup>(三)</sup>う。その際坪井医師令嬢がおとなしくしておらず、家にいると同様に振舞ったために三輪子夫人が困ったという話が伝わっている。当時の坪井芳治の住居は魯迅と同じ施高塔路で、近い距離にあった。<sup>(三)</sup>

『魯迅日記』一九三三年四月二十三日には次のように書かれている。「(略)晚、知味観(引用者注——料理店名)に席を設け、客を夕食に招く。秋田、須藤、浜之上、菅、坪井学士およびその夫人と子供二人(以下略)」（南雲智ほか訳、『魯迅全集』(邦訳)十八巻、学研)この中の「坪井学士およびその夫人と子供二人」という記載は、坪井芳治、三輪子夫人、長女不二子、次女明子のこと、二人の令嬢の年齢は六歳と三歳であった。

海嬰が坪井芳治の診療を受けなくなってからも、魯迅は坪井芳治に著書を贈ったり(一九三四年二月二十六日)、一家連れ立って果物を届けたりしている(一九三四年四月二十四日)。坪井芳治の名が『魯迅日記』に見られるのは、この四月二十日が最後である。

魯迅は坪井芳治に二編の詩（旧体詩）を贈った。一つは『魯迅日記』一九三二年十二月三十日に坪井学士のために揮毫したと書かれている次の詩である。

「皓齒吳娃唱柳枝

酒闌人靜暮春時

無端舊夢馭殘醉

獨對燈陰憶子規」

一方同日の『魯迅日記』に作家郁達夫に贈ったと書かれている次の詩は、中国版『魯迅全集』原注によれば坪井芳治にも贈られている。<sup>(四五)</sup>

「無情未必眞豪傑

憐子如何不丈夫

知否興風狂嘯者

回眸時看小於菟」

後者は、坪井君晒正という魯迅の筆跡が加わったものが、一九七九年刊の『魯迅詩稿』に写真版として掲載されている<sup>(四六)</sup>ところから、恐らくこの揮毫が中国で発見され、上記のような注になったものであろう。斎藤祥男氏によれば坪井芳治の三女の名眸は、この詩から取られた可能性があるという。<sup>(三)</sup>

これらの詩は、後に魯迅の作品集『集外集拾遺』に掲載されたが、現在までのところ坪井芳治遺品の中に魯迅の真筆は発見されていない。<sup>(四七)</sup>

一九三六年に魯迅が死去した後も、坪井芳治は上海で診療を続けた。前述のように、終戦前の篠崎医院の院長は浜之上信隆に代わっている。この浜之上信隆の名も、上記のように『魯迅日記』に見られる。

太平洋戦争終結後も、坪井芳治は診療を続けることを望まれて上海に残り、昭和二十三年に日本に引き揚げた。東京都台東区浅草柳橋で開業したが、昭和三十五年九月四日死去し、東京都谷中霊園の祖父芳州の墓に合葬された。享年六十二で、法名は慈眼院養眞徳芳居士である。

## 五 関連医師の経歴

### 一 樋口良平

『魯迅日記』一九三三年六月二十一日には、魯迅が坪井芳治の友人樋口良平に次の詩を贈ったとの記事が見られる。

「豈有豪情似舊時

花開花落兩由之

何期淚灑江南雨

又為斯民哭健兒」

中国版「魯迅全集」『日記人名注釈』<sup>(四九)</sup>によれば、樋口良平は当時上海紡績会社社医であった。同医師は、坪井芳治の葬儀に出席し、また坪井芳治の回想を執筆するなど、親しい友人であったという。<sup>(五〇)</sup>

この樋口良平については、慶応大学医学部小佐野満教授の好意によって、同大学の卒業生であり、同大学小児科学教室<sup>(三七)</sup>に学び、戦後新潟県の病院に勤務したが、比較的若い間に退職、昭和五十三年五月に死去したことが判明した。また執筆した回想の分析から、上海を去った後、濟南および青島において華北交通病院に勤務し、青島においては院長であったことが判明した。<sup>(五一)</sup>しかしそれ以上の詳細な調査には成功せず、未詳のままである。

## 二 篠崎医院創立者篠崎都香佐の経歴

篠崎都香佐<sup>(三九)</sup>（一八六五—一九三六）慶応元年一月二日鹿兒島に出生。鹿兒島県立医学学校卒業、東京帝国大学選科に籍を置いたことがある。長野県公立伊那病院院長および東京吉原病院長等を歴任。明治三十二年内務省防疫官。明治三十三年二月上海の諸会社の招きで渡航。篠崎医院創立。大正十一年十二月秋田康世に経営権を譲渡して帰国。昭和十一年三月一日東京で死去。

（この論文の要旨は、昭和六十三年五月二十八日、第八九回日本医史学会総会において発表した）

## 謝 辞

この研究の発表を許可され、貴重な資料・証言を提供された坪井三輪子氏、斎藤祥男・明子夫妻、種々の援助、教示を与えられた慶応大学医学部小児科学教室小佐野満教授、山形大学教養部松野良寅教授、仲田寛氏、市立米沢図書館、埼玉県立浦和図書館、鹿兒島県立図書館、東京大学医学部衛生学教室、京都大学医学部衛生学教室糸川嘉則教授、金沢大学医学部衛生学教室橋本和夫教授、京都府総合資料館、相国寺、金沢大学図書館医学分館、松井昭博士、春木伸一博士、秋田康一氏、浜之上訓衛博士、石川県立図書館、国立国会図書館、外務省外交史料館、薬丸比呂志博士、薬丸洋秋博士に深謝する。

## 文 献

- (一) 『魯迅日記』『魯迅全集』十四、十五卷、人民文学出版社、北京、一九八一年。
- および『魯迅全集』（邦訳）十七、十八、十九卷、学研、東京、一九八六（昭和六十一年）。
- (二) 泉彪之助『魯迅日記』における医療 第一報基礎的検討『福井県立短期大学研究紀要』第十一号、一九八五（昭和六十年）九月。
- (三) 斎藤祥男・明子による証言、一九八六（昭和六十一年）十月二十六日、東京、および私信。
- (四) 青木一郎『坪井信道の生涯』杏林温故会、大阪、一九七一（昭和四十六年）。
- (五) 青木一郎『坪井信道詩文及書簡集』岐阜県医師会、岐阜、一九七五（昭和五十年）。
- (六) 仲田一信『埼玉県医学学校と日習堂蘭学塾』浦和市尾間木史跡保存会、一九七一（昭和四十六年）。

- (七) 松野良寅「大木忠益」『明治の曙』二〇頁、遠藤書店、米沢、一九八五(昭和六十年)。
- (八) 松野良寅「米沢洋学の系譜(一) 坪井為春をめぐる人びと」同教授の好意による。
- (九) 泉彪之助「須藤五百三―魯迅最後の主治医―」『福井県立短期大学研究紀要』第十号、一九八五(昭和六十年)三月。
- (一〇) 『明治四年官員録および明治過去帳』松野良寅教授の好意による。
- (一一) 『坪井為春先生伝』『東医新誌』四三三三三、九九三、九九四頁、四三四号、一〇〇五、一〇〇六頁、一八八六(明治十九年)。
- (一二) 『堀内素堂』『米沢市史編集史料』一〇号。
- (一三) 日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、東京、一九八四(昭和五十九年)。
- (一四) 池田俊彦『島津斎彬伝』一九五四(昭和二十九年)、森重隆『薩摩医人群像』春苑堂、一九七六(昭和五十一年)より引用。
- (一五) 『東京大学百年史』(通史一)一九八四(昭和五十九年)。
- (一六) 文部省『学制百年史』一九八一(昭和五十六年)。
- (一七) 『東京大学医学部百年史』東京大学出版会、一九六七(昭和四十二年)。
- (一八) 『官員全書』(中)一八七二(明治五年)、国立公文書館蔵。
- (一九) 『埼玉県教育史』埼玉県教育委員会、一九七〇(昭和四十五年)。
- (二〇) 『埼玉県医師会史』(第一部戦前編)埼玉県医師会、一九六七(昭和四十二年)。
- (二一) 阿知波五郎『近代日本の医学』思文閣出版、京都、一九八二(昭和五十七年)。
- (二二) 『国書分類目録』(下)国立公文書館。
- (二三) 『東京医事新誌』一三一六号、一九〇三(明治三十六年)。
- (二四) 『京都日出新聞』一九〇三(明治三十六年)七月。
- (二五) 『大日本博士録』二卷、二五頁、発展社、東京、一九二二(大正十一年)。
- (二六) 藤野恒三郎『日本細菌学史』近代出版、東京、一九八〇(昭和五十五年)。
- (二七) 『京都大学七十年史』一九六七(昭和四十二年)。
- (二八) 西川眞八「坪井次郎」『公衆衛生』四六卷二号、一四二、一四三頁、一九八二(昭和五十七年)。
- (二九) 丸山博「坪井次郎」『ペッテンコフエル追悼演説』『森鷗外と衛生学』勁草書房、東京、一九八四(昭和五十九年)。
- (三〇) 『日本衛生学の黎明期と衛生学書』『第五十五回日本衛生学会展示目録』一九八五(昭和六十年)橋本和夫教授の好意による。

- (三) 『日本衛生学会五十年史』 日本衛生学会五十年史編纂委員会、一九八四(昭和五十九年)。
- (三) 森長英三郎『足尾鉍毒事件』(上) 日本評論社、東京、一九八二(昭和五十七年)。
- (三) 『三井事業史』本篇二巻および三巻上、三井文庫、一九八〇(昭和五十五年)。
- (四) 『京都府立京都第一中学校同窓会會員名簿』一九三五(昭和十年)十二月。
- (五) 『第三高等学校同窓会名簿』一九三九(昭和十四年)十月。
- (六) 『京都大学卒業者人名録』一九八三(昭和五十八年)。
- (七) 小佐野満 私信。
- (八) 坪井芳治『母乳栄養児血液所見』『児科雑誌』三〇四巻、一三〇〇頁、一九二四(大正十四年)。
- (九) 坂田敏雄『上海邦人医界明治年史』一九四二(昭和十七年)二月、上海歴史地理研究会刊『上海研究』第一輯所載、松井昭博士の好意による。
- (四〇) 『上海総領事館令第二号、医師規則』一九二七(昭和二年)六月一日、『外務省記録』「領事館令の制定改廃関係雑件」(上海ノ部)自一九二五(大正十五年)六月より、外務省外交史料館の好意による。
- (四一) 遠山景直著作兼発行『上海』一九〇七(明治四十年)二月(篠崎医院広告)。
- (四二) 秋田康一 私信。
- (四三) 『上海日報』一九三四(昭和九年)三月一日広告欄。
- (四) 浜之上訓衛 私信。
- (五) 『魯迅全集』七巻四三九頁注解、人民文学出版社、北京。
- (六) 上海魯迅記念館編集『魯迅詩稿』人民文学出版社、北京、一九七九年。
- (七) 魯迅『集外集拾遺』『魯迅全集』七巻および『魯迅全集』(邦訳)九巻。
- (八) 『日本医籍録』東日本版、医学公論社、東京、一九七三(昭和四十八年)。
- (九) 『魯迅日記人物注釈』『魯迅全集』一五巻、人民文学出版社、北京、一九八一年。
- (五〇) 樋口良平『遜居山人』坪井芳治の憶い出『日本医事新報』第二〇五三号、一九六三(昭和三十八年)八月。
- (五一) 薬丸比呂志 私信。

(福井県立短期大学第一看護学科)

# The family tree and the life of Dr. Yoshiharu Tsuboi, pediatrician for the son of Lu Xun

by Hyonosuke IZUMI

In the present communication, the family tree and the life of Dr. Yoshiharu Tsuboi, pediatrician for the son of Lu Xun, is reviewed.

Yoshiharu's grandfather was Tameharu Tsuboi, a famous medical educator in the Bakumatsu-Meiji period. Yoshiharu's father, Dr. Jiro Tsuboi, was a hygienist and the first dean of the Medical School of the Kyoto Imperial University. Yoshiharu was born in 1892 in Tokyo. His father died when Yoshiharu was five, and Yoshiharu went on to graduate from Kyoto Imperial University Medical School in 1923. After studying in the pediatric department of Keio University, he went to Shanghai, China. He worked as a pediatrician at the Shinozaki Hospital, taking charge of Zhou Hai Ying, son of Lu Xun, from 1932 to 1933. He developed a friendship with Lu Xun. Lu Xun presented two handwritten poems to Dr. Tsuboi.

Yoshiharu returned to Japan in 1948 after World War II, and died in 1970.